仕事人間の夫を変えた真空管アンプ

柳沢英子

緑の葉の重なりのなか，樹々を渡る風を身体中に受けて，大地の打ち鳴らす音楽にじっと耳をすませる．…できれば同じ気持ちになれる誰かと一緒に．空っぽになった心のなかで響き始める高原の歌．私にとって音楽は，それ以上のものではない．

…なあんて，言ってみたい．

機械が紡ぎだす，音楽再生の純度にしのぎを削ることを無上の歓びとするような誰かさんとは，本当は人生を共にしたくなかった，という言葉が何度か出かかった．

暇さえあれば来る日も来る日も機械とにらめっこ．…かどうかも定かではなく，とにかく自室に閉じこもってひねもすゴソゴソ．と思うと食事を知らせて覗けば，なにやら機械的な波形にうっとりと眺め入っている．あるいはハンダゴテ片手に「この美しい配線を見ろ」という目の合図．

そのあとは居間に移して，マンションに不釣り合いな大音響．お決まりのCD数枚を中心に試聴となる．いつもいつも同じ数曲から始まるので，音楽に疎い私にもその数曲は旋律をなぞれるくらい．隣近所から苦情が出ないかとひやひやしているのは私ばかりで，御当人はまったくの夢見心地．

なんて幸せな人なんだろ．こんな極上の趣味を手に入れられて（と当人は思っているに違いない）．いいや，いいや，そんなものめったにあるものじゃない．宝ものを見つけた夫をもつ私も幸せだと思うべきか．

仕事人間だった頃と比べて確かに夫は変わった．子どもの頃から夢見ていた大型真空管アンプ作りができるようになって（単に年齢によるものかもしれないが），その趣味とともに生活に幅ができたことは歓迎．

アンプを通して，音楽好きの二人の息子とも，まともな会話が成り立つようになったし，仕事に関係ある人としか付き合いのなかった夫に，趣味を通じて友人の幅も広がった．マンションの住人とは個人的な会話を交わすことがなかったのに，たまたま隣人が真空管アンプを手に入れられたのをきっかけに，アンプの診断，手入れを引き受けるようになって行ったり来たり．…こんなことは以前には考えられなかったことだ．

「車は走る凶器」とか言っていたのに50歳になって車の運転免許を取ったのも，実はアンプを試聴会場に運ぶのが目的だったなんて…私には思いもしなかったことだけれど．

とにかく，仕事人間だった頃より夫は私の考えるフツーの人間になってきた．息子たちにとっても，真空管アンプという「家の中でお父さんが一番」のものが，はっきりとしたかたちで登場したことは，とても嬉しい．音楽をあまり聴く機会がなかった私だけれど，夫が試聴している部屋の片隅でなるべく音をたてないように家事をしながら，たまに，えもいわれぬ，魂を引きちぎられるような音色を耳にする時があって，なぜだかその時には，「ああ，しまった!!」という気持ちになる．…これは一体何でしょう．

ともあれ次は，アンプをきっかけに手にした運転の腕で，新緑のさやぎ，星の瞬き，海の深い沈黙の発する妙なる音をさがしに連れていってくれるかもしれない（私は運転できない）．きっと夫は星を見つめながらも，次なるアンプ製作の配線図に思いをめぐらせるにちがいない，とは思うけれど….

（東京都調布市）